

中 畑 ・ 大 神 宮 社

大昔、丹波の国が湖であった頃、氏神様が田能の明神ヶ嶽の頂上にある大岩の上でお休みになり、さらに中畑の居神谷の腰掛岩でお休みになり、その後、お住いを定められた場所に現在の大神宮社をお祀りしたとの言い伝えがある。

祭神は豊受姫命。赤銅を巻いた鳥居と拝殿が、いかにも山村らしい静かなたたずまいをみせている。

ところが、幕末まではこの地は、京都府乙訓郡西山善峰寺の末寺で天台宗和光山神宮寺の寺地。天保三年(1832年)の「委細帳」(村勢要覧)によると、約1万平方^尺の境内には、本堂のほか、愛宕山地蔵・山王権現・三宝荒神・十五童子などがあり、「氏神弁財天宮」もここに鎮座していた。社前には山門はなく一ノ鳥居、二ノ鳥居が。祭神も、末社も仏教的な神様ですが、れっきとした村の氏神。

神宮寺という名が示すように、田能と同様、ここを本拠として中畑村宮座の仏事・神事が営まれていた。

境内に拝殿が寄進(慶応二年)された翌々年の明治元年(1868年)ここでも、神仏分離の波がおしよせ、長年親しんできた弁財天さんの名を呼びかえる決断を迫られた。

明治三年中畑村が亀岡藩に提出した社寺調書では、弁財天は伊勢内宮の女神豊受姫命に、三宝荒神は奥津姫他二柱に、熊野権現はイザナギにそれぞれ変えられ、社名も妥協案の「弁明神社」が否定され「大神宮社」となったようである。

神宮寺は地蔵堂とともに一旦は存続しますが、無柱の為にすたれ、明治四十四年の大神宮社改築の頃には、境内は今の姿になっていたと思われます。

社前の絵馬堂の瓦屋根と、鳥居の左側に水をたたえた池(おそらく弁財天の龍神池なのか)はわずかにかつての弁財天宮の面影をとどめている。

現在、ここで行われている祭礼の時、氏神以外に「山の神」という祭場が居神谷、森本、桜木、下の森、お道の5ヶ所にあり、山の神は氏神の3大祭のとき同時にお祀りするが、そのとき「おのうらい」「甘酒」「ぬかわら」「花紙」でお供えする。

(高槻市広報課発行・続にしえ物語、高槻市・榎田地域農業集団組合発行・語りつぐ榎田のふるさとより引用)